

【様式1】 ※A3版（1枚）に収める。

令和2年度 英語教育充実プラン 香美市立大宮 小学校		研究テーマ (英語教育推進方針)	「小中学校の9年間を通して、意欲的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」 ～目標・指導・評価の一体化に関する研究～			
年度当初の状況（4～5月調査を記載）		到達目標	年度末の到達目標達成状況（2月調査を記載）			
調査項目（意識調査の項目）			肯定的回答%	達成状況	考察	
児童	①英語で自分のことや意見を発表することが楽しい。	1 児童の意識調査 ①英語で自分のことや意見を発表することが楽しい。 88.4%→95.0% ②英語が好きだ。 92.9%→95.0% ③英語で日本の文化を紹介してみたいと思う。 90.2%→95.0%	88.4%	設定した3項目全てにおいて目標値を下回る結果となった。また、②③については年度当初と比較しても肯定的回答の割合が下がった。特に、③については-7.7ポイントという結果になっている。	③については、文化を紹介する機会自体が少なく、設問内容に関して、児童が達成感を感じる場面があまりなかったことが背景にあると考える。高学年に関しては教科化となったことで情報量が増えたことも影響しているのではないかと。また学年によっては、分からない表現を「くだく」際に難しさを感じる児童がおり、①②の項目に関する数値の低下につながっていると考えられる。	
	②英語が好きだ。		92.9%			89.5%
	③英語で日本の文化を紹介してみたいと思う。		90.2%			90.4%
教員	④言語活動を通して資質・能力を育成する授業づくりについて理解できている。	2 教員の意識調査 ④言語活動を通して資質・能力を育成する授業づくりについて理解できている。 85.7%→90.0% ⑤自分の地域・学校では、小小連携や小中連携ができている。 85.7%→90.0% ⑥小中のつながりを意識した指導ができている。 57.1%→75.0%	85.7%	設定した3項目全てにおいて肯定的回答の割合が100%であった。特に⑥の「小中のつながりを意識した指導ができている」については大幅に数値が改善された。また、最肯定回答に限定しても、④28.6%→57.1%、⑤28.6%→85.7%、⑥14.3%→85.7%と大幅に意識に改善が見られた。	全学年において、単元を計画する際に、前後の学年との系統性を考慮したことが最も大きな要因であると考える。その際、CAN-DO リストを基に付けた力を明確にした上で、それぞれのルーブリックを作成し、指導にあたったことも大きな要因であると考える。さらに小中、小小の交流授業を可能な範囲で実施できたことも連携意識の向上に繋がったと考える。	
	⑤自分の地域・学校では、小小連携や小中連携ができている。		85.7%			100%
	⑥小中のつながりを意識した指導ができている。		57.1%			100%
到達目標達成のための取組		取組計画		指標達成状況		
項目	成果指標	5～2月		達成状況	年度末評価	
英語教育の推進体制の整備	教員意識調査1 85.7%（最肯定）→100.0%（最肯定） ※肯定的回答は100.0%	①毎単元ごとに単元計画をもとにしたミーティングを行い、授業内容の充実を図る。 ②先進校視察、他校の授業づくり講座への参加（若干名）と校内での共有によって英語教育の充実を図る。 ③実践交流型研修（10月に予定、全担任が実践を持ち寄って共有）による校内での実践の共有を行い英語教育の充実を図る。		意識調査1：最肯定回答100% 取組計画にある単元計画を用いたミーティングが単元ごとに実施された。また、校内授業研究会で出された課題を次の授業研究会につなげ、指導改善に努めてきた。視察研修の報告や、実践を持ち寄っての校内研修など、研究推進を図る取組を予定通り実施できた。	A	
小中連携による英語教育の充実	教員意識調査5 14.3%（最肯定）→50.0%（最肯定） ※肯定的回答は100.0% 教員意識調査6 85.7%（肯定）→100.0%（肯定）	①CAN-DO リストを活用し、到達目標を明確にした授業実践。 ②中学校英語教員と連携した外国語科の授業実践。 ③香美市学びをつなぐ学校づくり研究会における連携（年間3回）		意識調査5：最肯定回答57.2 意識調査6：肯定回答100% 全学年が該当学年の前後の学年のCAN-DO リストを意識して単元計画を作成した。また、6年生の授業には中学校の英語教員が週1時間TTとして入ったり、中学生や他校の小学生と交流する機会を設定したりした。	A	
指導と評価の一体化を踏まえた評価活動の工夫と授業の質の向上	教員意識調査7 教員意識調査8 教員意識調査18 85.7%（肯定）→100.0%（肯定） 教員意識調査19 14.3%（最肯定）→50.0%（最肯定） ※肯定的回答は100.0%	①CAN-DO リストを活用し、到達目標を明確にした授業実践。 ②評価方針をもとにした単元ごとの評価計画の作成（どのように学んだことを知るのか）、ルーブリックの共有（児童-教師） ③評価計画に基づく授業と評価の実施（児童の変容の見取り） ④授業研究会の実施による校内研修の充実（授業づくり講座2セット、改善プランに関わる授業研究会2回） ⑤英語教育指導力向上に関わる校内研修の充実（毎月2～5週目の校内研の時間を活用）		意識調査7, 8, 18：肯定的回答100% 意識調査19：最肯定回答71.4% 評価計画を立ててCAN-DO リストを基に児童の具体的な姿でルーブリックを作成し授業を行ってきた。形成的評価を積極的に行い、次時の指導へ生かすようにしてきた。また、評価に関しては研究授業での課題改善を図るだけでなく、文部科学省から配信されている動画の視聴や視察研修の報告などからも研修を深めることができた。	A	

※評価 A（十分達成） B（おおむね達成） C（あまり達成できていない） D（全く達成できていない）